

オトナ(6歳以上)が♂15頭♀48頭、5歳♂1頭♀6頭、4歳♂7頭♀7頭、3歳♂12頭♀4頭、2歳♂6頭♀14頭、1歳♂12頭♀6頭、0歳♂14頭♀16頭の計158頭であった。またA1群の周辺に頻りに姿を現わすは約15頭いた。1979年の分裂時の個体数は90頭であり、A1群は年8%程度ずつ総数が増加している。このままのペースで増加が続けば、数年のうちに再分裂が起こることは必至であろう。志賀A群は25年間以上にわたって個体識別に基づく詳細な人口学的資料の累積がなされている全国でも屈指の貴重な群れであるので、早急に今後の管理計画を案出することが望まれる。

なお2月下旬に、合同調査団(筆者を含む10名)がA1群の56頭を一時捕獲し、生体計測・採血等の総合調査を行ったことを付記する。

課 題 2

交尾期におけるヤクザルオスの群間移動・移入・移出

*
竹門直比・David S. Sprague(京大・理)

*旧姓 岡安

ニホンザルの野外研究は、主に餌付けされた孤立群において行われてきた。しかし、本来ニホンザルの群れは、他の群れと遊動域を接し、出会いの機会も多かったはずである。この他群との接触は、特に群れを移籍するオスにとって重要な社会的場面を作り出していたに違いない。本研究は、オスの移動が、多数群が存在する中でどのように行われているかを明らかにする目的で行われた。

屋久島の低地林には、ニホンザルの群れが遊動域を重複しながら、多数分布している。非交尾期の各群れの性比は約0.9で、離れオスも殆ど見なかったことから、オスの大部分が群れ内で生活していると考えられる。これが交尾期になると、調査対象の3群周辺に、識別されただけでも20~40頭('84・'85)の群れ外オスが出現し、活発に群間移動していることが示唆される。

群れ外オスの出現数を、対象群の1つM群について日別に見てみる。'84年秋は、10月下旬と12月初に増加し、顔ぶれも変化している。発情メスは10月下旬には、オトナメス8頭中5~6頭と急増している。12月初旬にはやや減少し(3頭)、代わっ

て隣りのH群の発情メスが7頭中3~4頭に増加している。この時は、M群に出現していたオスがH群で見られたり、M群の群れオスがH群を訪問したりしている。'85秋については、交尾期は前年ほど活発でなく、9・10月は発情メスは各群1~2頭、群れ外オスも0~1頭であった。11月中には発情メスは3~5頭に増加し、群れ外オスも複数出現した。12月にはいると交尾期はほぼ終了し、オスの移動もなくなってしまった。

以上の変化をみると、オスの群間移動のきっかけは、隣接群の発情メスの増加が重要と考えられる。発情メスは大胆で声も目立つし、一度に6頭も発情すると相手が不足し、群れから離れた発情メスが他群のオスの誘因になっていることは、充分に考えられる。

屋久島上部域にすむヤクザルの生態学的研究

好広真一(龍谷大・経営)、山極寿一、
大竹 勝(日本モンキーセンター)、
増井憲一(京大・理)

課 題 3

本年度は採択なし。

課 題 4

黒部川流域におけるニホンザル自然群の分布

赤座久明(大沢野中学校)、加藤 満
(高蔵寺高校)

黒部川流域で、ニホンザルの分布調査を行った。調査の目的は、(1) 黒部川源流域のニホンザルの生息状況を現地調査し、群れの分布限界域を明らかにする、(2) 黒部川下流域で過去5年間継続して観察している17群についてのセンサスと遊動域の調査、の2点である。

(1)の調査結果

85年7月から10月にかけて、延べ24日間の調査を行った。調査地域は黒部川の源流地域で黒部川